

和牛のルーツ「千屋牛」 維持・拡大へ産地で盛り上げ



「焼肉 千屋牛」で人気の高い千屋牛セット

和牛のルーツとされる「千屋牛」の発祥地、岡山県新見市で
銘柄牛産地の維持・継続へ畜産農家やJAグループが一体となって取り組みを進めている。
地元のJA晴れの国岡山は繁殖・肥育農場を運営、農家から育成預託も受けて生産をサポートする。
地域の農家との連携や消費者の支えが大きな原動力となっている。

千屋牛とは新見市が発祥とされる
国内最古の蔓牛（優良系統牛）「竹
の谷蔓」の系統を引く黒毛和種だ。
体格がよく、足腰が丈夫で、資質

品位に優れ、繁殖能力も高いことか
ら全国に広がり、和牛ブランドのル
ツとなった。江戸時代から続く歴史
と伝統を守りながら、改良が重ねら

れてきた千屋牛は、岡山県内でも優
良な肉質の和牛として知られており、
ほど良い霜降りと赤身が特徴。年間
の生産頭数は少なく、希少価値も
高い。JA全農おかやま畜産部の難
波智明さんによると、県内の銘柄牛
の中でも「歴史があり認知度は高い」
という。

肉質へのこだわり 育ちはJA直営牧場

新見市を走る国道180号沿いに
ある、JA晴れの国岡山直営の「焼
肉 千屋牛」（同市正田）はその名
の通り、「千屋牛」をメインに取り扱
う焼肉店だ。新型コロナウイルスの影
響で営業時間を短縮する期間など
もあるが、県内外からリピーターが
多く訪れ、週末には90席が満席にな
るほどの人気を集めている。

店を切り盛りする池田克さん（42）
は「やわらかくて美味しい肉の提供に
こだわっています」と説明。食べた来
店客からは「他では味わえない美味
しさ」などの声が上がっている。

コロナ禍で焼肉弁当や牛丼など、
持ち帰り商品の注文も多い。コロッケ
などの総菜の人氣も高く、新規客の
掘り起こしにもつながった。原料とな
る地元産の「千屋牛」の肉は、市

系統牧場と市場から子牛導入 繁殖農家を買い支える努力も

内の「Aコープあしん店」に発注し
て仕入れている。元をたどればいづれ
も同JAが運営する繁殖・肥育牧
場で育った牛だ。
同JA直営の牧場は繁殖2カ所、
肥育2カ所の計4カ所ある。現行の
体制になったのは2018年度からと
いい、繁殖から肥育までの一貫生産
を手がけて生産基盤の確保に力を入
れる。

販売される「千屋牛」は、①新見
市内で繁殖・肥育、②岡山県内で
生産された子牛を導入し、同市内
で18カ月以上肥育——のいずれかを
満たすのが条件。JA直営の肥育
農場である千屋肥育センターと田淵
農場では、同JA直営の繁殖農場
2カ所からの導入をメインとし、岡
山県内の市場からも導入している。



JA全農おかやま畜産部 難波智明さん



- 【取材協力店】
焼肉 千屋牛
岡山県新見市正田397-2
JA晴れの国岡山（あしん広場内）
- 1 広々とした焼肉千屋牛店内
 - 2 かつては農耕牛として重宝されていた千屋牛
 - 3 千屋牛を取り扱うあしん広場ふれあい市場特産館の
精肉コーナー
 - 4 池田克さん（二列目右）と焼肉 千屋牛スタッフの皆さん



JA晴れの国岡山営農部畜産課
新見畜産事務所の植木博信副課長
は「地元の繁殖農家が育てた子牛を
できるだけ導入するようにしていま
す」と語る。「千屋牛」の古里を守
り抜くための生産基盤の維持にもつ
ながる。

千屋牛を肥育する際の餌には、安

- ⑤ 放牧の様子
- ⑥ 千屋牛繁殖のベテラン小川軍紀さん
- ⑦ 井倉牧場 藤井場長
- ⑧ JA直営の千屋牛繁殖農場・長久牧場の皆さん
- ⑨ 育成中の千屋牛の子牛(井倉牧場)
- ⑩ 藤井場長も学生時代に経験した伝統の「碁盤乗り」(写真:新見高校提供)
- ⑪ 新見市和牛改良組合 組合長の江田英明さん
- ⑫ 新見市千屋で繁殖・肥育を手がける峠田一也さん



- ① 田淵農場 川上場長(右)とスタッフの皆さん、JA晴れの国岡山の植木副課長(左)
- ② こだわって与えている岡山県産の稲わら
- ③ 国内最古の蔓(つる)牛「竹の谷蔓」の系統を引く千屋牛
- ④ JA西日本くみあい飼料の皆さん

全を重視して選んだ岡山県産稲わら
や新見市和牛改良組合が認めた肥育
専用の配合飼料などを活用する。

肉質改善に向けては、JA西日本
くみあい飼料をはじめとする関係機
関と連携し定期的に検討会を設け
飼養技術を高めるほか、地域の畜産
農家との連携も大切にする。田淵

ベテラン農家が若手育成 育成預託担い、地域支える

井倉牧場(新見市法尊)は、肥
育素牛となる子牛を育てる繁殖農
場の1つで、2018年度からJA
が運営にかかわっている。

現在は場長を務める藤井孝則さん
(22)ら従業員が3人勤務している。
午前7時半から始動し、「子牛が体
調を崩さないよう、少しも目が離せ
ない」(藤井さん)と忙しい日々を送っ
ている。

牧場はもとと、過疎・高齢化
にともなう繁殖農家や「千屋牛」の
減少に歯止めをかけようと、地元の
農家を中心になって立ち上がり、生
まれた子牛を預かる牧場としてス
タート。安定した肉用牛経営がで
きる生産基盤の確保を目指した。

現在も母牛の管理を中心に担うベ
テランの小川軍紀さん(81)は長く
この牧場で責任者を務め、妻ととも
に運営していた。しかし、年齢や次

農場の場長を務める川上泰輝さん
(49)は「牧場近くの畜産農家に肥
育に関する助言をもらうなど頻繁に
情報交換をしています。他に負けな
い肉質の銘柄牛を育てるという目標
が同じためです」と説明する。

の目標は、家畜人工授精師の資格
を取ることだ。「牛飼いとして若い世
代がもつと入ってきてくれたらうれし
いです」と期待する。

地域が一丸となって 千屋牛の維持・拡大へ

「千屋牛」を代々守り継いでいる畜
産農家の思いは更に熱い。産地を守
ろうと活動する「新見市和牛改良
組合」で組合長を務める江田英明
さん(72)は繁殖農家の3代目だ。
勤めていたJAを退職した後、義父
の後を継いで繁殖に乗り出した。あ
わせて、改良組合としては、和牛を
飼い慣らす伝統的な調教技術を後
世に残す活動を地道に進める。

現役時代から畜産にかかわる機会
が多かった江田さんは「今度は地域に
恩返しをしたい」との思いを強く持つて
います。千屋牛を守るには行政や地
元のJA晴れの国岡山、JA全農お
かやまなど関係機関との連携が大
切。若手を巻き込んで盛り上げてい
く機運をつくりたいと考えています」と
力を込める。

新見市千屋で繁殖・肥育の一貫
経営をしている峠田一也さん(65)。
家畜人工授精師だった父の背中を見
て、獣医師の資格を持つ3代目とし

代につないでいくことを考慮し、JAに
運営を託す判断をした。

牛舎には現在、母牛はJAが所有
する約50頭と、小川さんが飼養する
38頭がいる。このほか、井倉地区の
繁殖農家から預かる分も含めて哺
育・育成牛が約70頭おり、地域の
農家を支える役割も果たす。「繁殖
は簡単なようで難しい。母牛は1年
1頭の子牛を産めるといわれるが思
うようにはいかない」と明かす小川さ
ん。「自分の牛だけでなく預かった牛
を育てるのは本当に大変。本
気で繁殖に携わる気持ちがあれば
続きません」と強調する。

藤井さんは従事して丸3年だが、
地元・県立新見高校の出身で牛の
管理などにも経験、新見地域に伝わる
調教の技「碁盤乗り」にも挑戦した
ことがある。実家でも牛を飼っていた
ものの、牧場に入った当時は分からな
いことばかりだった藤井さん。「小川
さんをはじめ近くの畜産農家やJA
西日本くみあい飼料など皆さんに知
識や技術を教えてもらっています」と
振り返る。

そんな中、育てた牛が昨年、枝
肉共進会で賞を獲得した。「理想の
牛にする種付けのポイントが分かった
ような気がします」と話す藤井さん

で繁殖牛20頭、肥育牛40頭を飼養
する。峠田さんが一貫経営に「だわ
る理由の1つは、相場に影響されない
経営をするためだ。子牛は井倉牧場
に預けることもある。

一方で、獣医師として新見市の繁
殖・肥育農家を巡回し、地域で育
つ牛の健康を守る。「千屋牛」を残
したい、残さなければならぬとの強
い思いが突き動かす。しかし、農家
の減少は続いている。峠田さんは、
千屋地区でも「20年前の10分の1
程度になってしまった」と打ち明ける。
千屋牛全体の出荷頭数を維持・拡
大していくためにも「地域が一丸と
なり本気で取り組むことが重要す
」と強調する。

標高400〜700mという環
境を活かし、さかのぼれば夏は放牧、
冬は各農家の畜舎で飼養される「夏
山冬里方式」で育ててきた。「千屋
牛」の生みの親とされる先人の太田
辰五郎に触れ、「住民の暮らしが少
しも豊かになればと願って投資し、
牛の改良を始めた」と聞いていますが、
先見の明がありました」と話す峠田
さん。「千屋牛が地元からいなくなっ
たら語る資格はない。一生をかけて
守るのが仕事だ」と、地域の宝を守
り続ける覚悟だ。